

「爺ヶ岳・東尾根」滑落事故報告書

報告者：T嬢

1. 事故内容と経過

発生日	2004年5月3日 (月)		
事故内容	東尾根 1500～1550m付近からのA氏の滑落 1450m付近における尾根の取り違いによる道迷い		
備考	文中 A：竜少年（L 男性 / 62歳） T：ヨーコ（女性 / 57歳） S：T嬢（女性 / 38歳）		
時間	標高	事故経過とパーティーの行動	Sの行動
11:00	1970m	<p>テント撤収と幕営地の出発</p> <p>A：「スリング、カラビナは使えるよう外に出すこと」</p> <p>S：「補助ロープは誰が持つか」</p> <p>A：「Sが持つように」</p> <p>・Aの指示によりトップA，2番T、最後尾Sの順番で歩きだす。</p>	<p>・ザックの上部にロープを収納しシュリング 120(1) 60(2)、カラビナ(3)を体幹にかける。</p>
	1500m ～ 1550m	<p>尾根からの滑落</p> <p>Aが尾根よりやや右の方向にルートを取り、下降していく</p> <p>A：「ア - ツ」</p> <p>叫び声とともにドスンという大きな音を聞く。</p> <p>T：「Aさんが落ちちゃったよ、どうしよー、Aさーん」</p> <p>Tは尾根よりやや右に下がった斜面に立っていた</p> <p>S：「Aさーん」、2・3度Tと交互に呼びかける。</p> <p>A：「おーい」</p> <p>T、S：「大丈夫ですかー？怪我してますかー？」</p> <p>の問いに返事の応答のみ。</p> <p>尾根上からはAの姿は確認できない。</p> <p>T：「救助連絡しようよ」</p> <p>S：「あれだけの声が出るので、まずはAの状況を確認してきます」</p>	<p>・ 尾根を歩いている</p> <p>・ A、Tの声を聞き、Tのもとに行く</p>

<p>12:00 ~</p>	<p>Aの救助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下降途中Aが立っていることが確認できた <p>S:「大丈夫です。Aさん自分で立ってます。」とTにむけて呼びかける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロープ一杯の地点からさらに 5 m程下にAがいた為 登り返してもらおう。 ・A:「頭を切った、肩とももを打ったが骨折はなさそうだ」 ・ 顔面に出血の跡がありAは水筒の水で洗ったとのこと ・ Aより尾根へのルートを作ること、Tをまず尾根にあげ次にAまで戻りザックを上げるよう指示が出る ・ロープ末端まで登りAは立ち木にてセルフをとり待機する。 <p>・ T、ロープに沿ってトラバースし、支点でセルフを取る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 3人合流。Aセルフをとる ・ A、Tの順に尾根へ上がる。 ・ Aがザックを担ごうとするが担げなかった。 T、SでAの荷物の分配をし、歩きだす。 Aの傷の処置は安定した場所が確保できたら行うこととした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Aの声により生存が確認できた為、下降の体制に入るが、ロープをつけずにいたため、Tよりロープをつけたほうがいいと言われ、立ち木にて支点を取り、下降する。 ・ Tにセルフピレイをとり待機するよう伝える ・ 下降途中小枝にロープが絡まりついたためロープを解す。 ・ 斜面にAの帽子・手ぬぐいが落ちていたため回収 ・ 20mではAの地点まで届かずシュリッゲ2本で延長する ・ セルフを介助しAのもとまで下降する。 ・ 下記の通り受傷状況を確認、水筒の水でAの顔を清拭する ・ 尾根に向かって登り返すが尾根までロープが足りないため、途中で支点をきる。Tにロープにそってくるように伝える ・ ロープを回収、Aに向かって下降開始 Aと合流後Aのザックを持ちAと共に登る。Tにロープを張るよういう。 ・ そのまま尾根へのルートを作る
<p>14:00</p>	<p>道迷い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トップ交代しS, A, Tの順で雪の尾根道をゆっくり歩く ・ S:「もし道が間違っていたら指摘して欲しい」 A:「OK」 <p>1450m</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 赤布発見できぬまま、しばらくして <p>A:「尾根を間違えたかもしれない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地図とコンパスにより現在地の確認を試みるが判明せず 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小ピークにて赤布を発見する そのまままっすぐ歩き、次の赤布を探すが発見できず ・ 地図とコンパスをだす

16:00		<ul style="list-style-type: none"> ・あたりの山を確認するが、ガスで見え隠れしはっきりしない。川がみえ対岸の山の名前を確認しようにも地図の範囲を超えていた ・Aより東を目指して下山するよう指示がある ・東尾根を探すため右3回、左2回尾根をトラバースする ・尾根は傾斜が強くすべりやすかったため、後ろ向きで下降して行った ・Tが持っていたAの荷物はAが再び持つようになる ・角度により左手に緑の屋根が見えた <p>S : 「SNさんに連絡を入れたらどうか」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aが再度携帯に連絡するが不在 <p>S : 「ISさんに連絡するか」</p> <p>A : 「救助要請ではないから必要ない」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何度か休憩を入れながら下山 ・Aよりピバークすることも考え行動しようと支持あり 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンパスで常に東を確認しながら下山 ・パーティー間の距離が出来てしまいAよりゆっくり歩くよう指示される <p>・SN氏の携帯に連絡するが不在（電波が微弱のため、届かなかった）</p> <p>注：SN氏：会の留守宅本部 IS氏：県連の遭対担当</p>
16:30		<ul style="list-style-type: none"> ・SN氏よりSの携帯に連絡が入り、状況報告する ・引続き緑の人工物めざし下山 ・しばらくして緑の人工物の隣に池があるのが確認され現在地が判明する。 ・東尾根はさらに一本右の尾根であることが予想された ・尾根に一本パイプが敷かれていたためそれに沿って下山して行くことにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・SN氏から折り返しTELが入る。
18:00	950m	<ul style="list-style-type: none"> ・下山 ・鹿島槍ガーデンの好意により傷の処置のための場所を提供してもらう ・T、留守宅のSN氏へ下山報告（携帯） <p>・傷の手当ての為病院へ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・A、傷の消毒

2. 事実関係

装備

滑落からの救出の際、補助ロープ・カラビナ・スリングとともに数は足りていた。

ビバークに関しては水・食糧・装備の点から十分可能であった。

赤旗（竹竿）は救助の際の妨げになった為、救助途中で破棄した。

天候

事前に5月4日以降の天候が崩れて行くことが予測された為、計画を1日繰り上げた。

3日間を通し天候は比較的安定していた。

最終日は早朝より雲が多く、時間の経過とともにガスが多くなり、午後になると周辺の山々が、みえたり見えなかったりの繰り返しが多くなった。視界をさえぎることはなかった。

最終日の天候が崩れることは予測していた

天候の崩れに伴い気温が下がることはなく、寒さは感じなかった。

午後、時折小雨を感じることもあった。

テント撤収時、気温が高かったため雪に埋め込んであった竹ペグが雪の融解により露出していた。

滑落直後、確認できたA氏の受傷状況

両第1指から手背・手掌にかけての腫脹及び発赤

頭頂部から右側頭部にかけての5, 6ヶ所の裂傷

右頬部の擦過傷 右前額部の 5 cmにわたる裂傷

右肩・右大腿部の打撲（滑落直後は打撲か骨折かの判別はついていないが、右上肢の回旋運動と歩行は可能だった）

道迷い

1600mの小ピークで赤布を確認以降、赤布はまったくなかった。

往路では1600m以下は雪がほとんど付いてなかったが、復路では雪がなかなか消えなかった。

地図とコンパスで現在地を確認したが、はっきりわからなかった。

現在地がわからなくなった時点で東に向かって下山するように指示され、常にコンパスで東を確認しながら下山した

川をはさんで対岸の山が何処の山なのか確認できる地図が無かった。（地図の範囲が狭すぎた）

川の走行や民家などの人工物により現在地を割り出す努力はした。

現在地が不明になってから、高度計により標高がわかりとても役立った。

迷った際、尾根から尾根を渡り歩いたり、どれも東尾根に感じられたり、自分が何処にいるのまったくわからなくなったり、疑心暗鬼のような不思議な感覚になった。

民家を目印に下山したが、池の確認により現在地が明確になり、尾根を一つ間違えていることが判明した。

ビバーク地点も探しながらの下山であったが、テントを張るだけの平地はなかった。

行動の限度を日没前の18時までと決めた。

その他

行動中、精神的に動揺することはなく比較的冷静でいられた。メンバーも表情は険しかったもののパニック状態に陥ることはなかった。

T氏の疲労度は強かったが、歩くことをやめてしまうことはなかった。

行動中、定期的に休憩時間を取り水分の補給はできた。

リーダーの指示は全行動を通して定期的に出されていた。

3. 事故により思ったことと反省点

道迷いに気がついた時点で尾根を引き返す選択肢もあったが、A氏のケガの状況と体力の消耗の程度からみて登る余力はなかったのではないかと。

読図の技術と知識をもっとしっかりもっているべきだった

行動中もっとこまめに地形図と地形の照らし合わせ、コンパスによる位置の確認をすべきだった

A氏の荷物を一部持つだけの余力がSに残されていたことは良かった。

道に迷った時点で冷静さを失っていたのかも知れないが、行動中はメンバーが比較的冷静でいたのが二次的な事故を起こさずに済んだ大きな要因だったのではないかと。

A氏救助の際、最初ロープをつけずに下降しようとしたことは軽率な行動であった。

天候の大きな崩れがなく幸運であった。

以上、報告いたします